上高井教育会報

第143号
発行所　上高井教育会
発行人　上高井教育会長　宮川　博
編集人　会報編集委員長　滝澤祥匡
印刷所　須坂新聞社

さらに向学の気風を

上高井教育会長　宮川　博

風薫るさわやかな季節になりました。この度、会員の皆様のご推挙をいただき、人格識見共に優れた山崎純前会長先生のあとを受けて、上高井教育会の進展のために微力を尽くすことになりました。会員の先生方のご助力ご協力を心からお願いする次第であります。

◇　◇　◇

平成二年度は様々な教育問題をかかえた年でありました。

本年度もまた幾多困難な問題をかかえているわけでありますが、会員の皆様の英知を集めて前向きに取り組んで参りたいと思います。

さて、教育をめぐっては、学力の問題や生徒指導上の問題、進路指導にかかわる問題やさらには不登校の問題など極めて困難な状況があるわけであります。今、社会は急激に変化しています。そして子どもたちは、私たちよりもはるかに敏感にその変化に反応し、考え方も生活の仕方も多様化しています。彼等の多くは物質的に恵まれた環境の中で成長し、その恩恵を受けることは当然のことのようになっています。しかし、一方では苦しい生活環境の中にいる子どももあるわけであります。さらに家庭や社会の教育力の低下や人間が生きていくために必要な社会のルールを尊重する意識や基本的生活習慣の欠如なども指摘されているところであります。

このような状況の中にあって、学校は子どもたちに、自分自身を真剣に見つめる心や他の人を優しく思いやる心や美しいものや崇高なものに素直に感動する心、さらには公共のために進んで尽くそうとする心などを育てたいと思うのです。そして、知・徳・体のバランスのとれた発達と、個性豊かでよりよく社会に貢献できる能力をそなえた人間を育てたいと思うのです。

昨年度は、現役卒業生の大学合格率に端を発した学力の問題が県民の間で論議を呼びました。私たちは子どもたちの学力向上のため指摘されるまでもなく、真剣に取り組んで来たところでありますが、今、ここで立ち止まって、世論に耳を傾け、子どもの姿に本当に学力が身についているのかを見つめ直してみる必要があると思います。そして、あくまでこの問題は小・中・高を通じてのだいじな課題として受けとめ、それぞれの段階で鋭意努力しなければならないと思います。小学校は小学校として、中学校は中学校としての基礎的基本的な学力の定着を図るべきであり、まさに子どもたちの発達に応じた教育の適時性をこそ大切にするべきであると思います。

時恰も新教育課程が、小学校においては平成四年度から、中学校においては平成五年度から完全実施になるわけでありまして、各校においては自校における教育課程の編成を子どもたちの願いや父母・地域の願いを汲みとる中で創造しなければなりません。

子どもたちは「よくわかる授業」「自分の力でできた喜びの体験」を願っています。私たちはその願いに応えるためにいい授業を展開していかなければなりません。そして授業の積み重ねの中で、子どもたちに自ら学ぶ意欲を育てていきたいと思うのです。

いい授業は深い教材研究の裏づけが必要であります。何よりも教師の求める姿勢が大切であります。子どもたちは教師の求める姿を敏感にとらえます。そして、その姿に自分を重ねて共に学んでいくのです。

本年度の教育会は、向学の気風に満ちたお互いの力量向上のためのものでありたいと思うのです。

（相森中）

教育会だより

4・1　選挙公示　〈役員選挙〉
・4　第1回代議員会。第2回選挙管理委員会。
・5　理事長選挙。第3回選挙管理委員会。
・11　第2回代議員会。第4回選挙管理委員会。
・12　副理事長・理事・信教常任委員・信教代議員選挙。第5回選挙管理委員会。
・13　教育会会計監査会
・15　第1回常任委員会。
・19　研究委員会並びに同好会世話係会(1)
研究総委員会。於須坂小学校。
講演会　中心講師　三枝孝弘先生（埼玉大学教授）
演　題　「自己形成の要因」
・22　第1回研究委員会世話係委員長会(1)
・25　第3回代議員会。新任者会員歓迎会　於教育会館
新任者会員22名。
26　第6回選挙管理委員会。
監事選挙
5・1　第2回常任委員会。
・7　同好会発足会。於須坂小学校。
第1回同好会世話係会長会。於教育会館
・25　教育会定期総会・講演会　於須坂市公民館
・平成2年度会務報告並びに決算、平成3年度事業計画並びに予算の承認。
講演会　講師　宮脇　昭先生（横浜国立大教授）
演　題　「人間と環境」
・会員意見発表
「教職六年目を迎えて」迯町孝子教諭（高山小）
「ＡＥＴ（英語指導助手）と共に」
北堀　宏教諭（高山中）
6・7　第3回常任委員会
・9　第105回信教定期総会　於長野市民会館
参加者79名
・13　第4回代議委員会
・27　第15回上高井教育会教育懇談会　於教育会館
・29　上高井教育会報第143号発行

二つの問い

研究委員長　冨澤　慶吉

私には今二つの問いがあります。一つは、二十一世紀の国際社会の中で、日本が世界に貢献をしながら自国の発展を続けていくためには、どんな人間を育てていったらよいのだろうかということです。二つ目は、学力をつけるためのわかる授業はどのように展開したらよいのだろうかということです。

前書に対する意見は、新指導要領の基本的なねらい㈠豊かな心とたくましさ㈡変化に対応して自ら学びつづける力㈢基礎基本と個性重視㈣自国の文化の尊重と国際理解教育、ということに示されているといえます。後者に対する答えは㈠子どもにどんな活動(指導)をさせるのか㈡その中でどんな力をつけるのか㈢その評価を子どものどんな育ちでみとどけようとするのかという三つの視点を明確にすえた仮説をもって授業をすることだと考えています。

つまり前者の大きな問いは、十年毎に見直しながら進めてきているわが国の教育の方向をしっかり見定めることから、後者の小さな問いは、私たちが行ってきた研究委員会の実践の中からその答えを見い出したいと思っております。

しかし、この二つの問いは常に一体的にとらえられるべきものであり、「ねばり強く自己形成していくための指導」という全体テーマは、この二つの問いを授業の中で確かにとらえ、明らかにするために設定されているわけです。だから私たちは、いつもこの大きな問いを持ち、教室の実践で小さな問いの中に具体化してテーマに迫ることが大切だと思います。

大きな問いに対する答えは多くの教育学者は勿論、各界を代表する有識者によって長い間審議されてきたものであるから、どの答えをとってみても、いつの時代でも目指す方向としては不変の真理に根ざしているように思われます。したがって答えが示されているというより、この内容がいかに各学校現場において実践されていくかによって答えが明らかにされるものであるともいえます。

豊かな心とたくましさを持った子どもの姿は、どういう活動によってどんな力がついたときに育つのだろうか。基礎基本の力を確かに身につけ、その子らしい生き方ができるようにするにはどのような指導仮説をもったらよいのだろうか。今ほど、各学校においてこの二つの問いを一体化するための創造と共同研究が求められている時はないでしょう。

(墨坂中)

同好会発足にあたって

―自彊息まず―

同好会会長　黒岩　英雄

歴史と伝統に輝く、上高井教育会の同好会が、延べ二八九名(六月一日現在)の参加のもとに発足をみるに至ったことは喜びにたえません。

本年度も昨年同様に、哲学・文学・美術・音楽・理科・書道・算数数学・体育・地歴・俳文学・教育心理・カウンセリング・技術家庭・道徳の十四の同好会が設けられたことは、周知の通りであります。

そして、それぞれに学識経験豊かな世話係・会長の先生方が当たられ、具体的に年間計画を樹立され、研修意欲に燃えておられることは歓喜にたえません。

本郡同好会は、創設以来研究委員会と並んで教育会の研究活動の両輪として位置付けられてきており、過去幾多先輩の先生方が研鑽に励んできておられます。このことは本質的には今も変わってはいないはずであります。

昨年度の反省では、同好会への参加者が少なく、しかも出席者が少ない、関心に乏しい、会員の固定化傾向がみられる、また若い会員や女性会員の参加が少ない等…気がかりな点がいくつか指摘されています。

同好会は、所詮、同好の士を持って組織されるのが基本でありますし、強制的な性格のものではない事は言うまでもありません。

しかし、教職員としての大事な研修の場としての同好会であり、教師の資質の向上ひいては生涯学習につながっていくものとしても、その果してきている役割は大きいものがあります。

われわれ教師は、絶えず父母、地域社会から注目され、期待も寄せられていることを念頭に入れ、そのためにも専門職としての力量を高める努力を怠ってはならないと考えます。

まさに〝師道は日々足下の実践にあり〟です。

学習指導そして生徒指導にと日常の教師の忙しさは十分わかりますが、「忙中閑あり」とも言われます。

辺幅を飾る…に終わらぬよう大いに盛り上げていってほしいと願うものであります。

道元禅師は、「玉は、琢磨によりて器となり、人は、錬磨によりて仁となる。」「玉磨かざれば光りなし」…と言われています。

お互いに磨き合い…自彊不息(自ら彊て息まず)本年度の各同好会の活性化を期待しまして発足にあたっての挨拶と致します。

(高甫小)

特殊研究者・県外視察者

(氏名)	(学校名)	(研究テーマ)	(方面)
堀米　富平	高山小	松川渓谷の植生について	神奈川
丸山　文雄	仁礼小	須高地方の幕末維新史研究	東京
和田　邑吉	常盤中	教材集－須坂の歴史と文化を訪ねて－	徳島
青木　久枝	栗ガ丘小	少人数学級のユニークな経営の在り方	上越
迯町　輝雄	栗ガ丘小	国語教育－豊かな心を育てる国語教育	関東
丸山　京子	栗ガ丘小	体育指導のあり方の研究	東京
佐藤富美子	高山小	教育課程の研究	静岡
滝沢　幸嗣	高山小	生活科の評価について	関東
藤沢　敦子	須坂小	生活科への取り組み	愛知
帯川恵美子	須坂小	保健室経営のあり方	静岡
金田　義雄	小山小	社会科における調べる力の育て方	関東
大草　政子	小山小	オープンスクール(個性化教育)について	関東
岸田　幸弘	小山小	個を育てる教育	関東
牛山　勉	森上小	主体的な社会科学習指導の在り方	関東
高山　健	森上小	自ら考えを伸ばし、関わりあって学習する指導	関西
宮下　紀子	日野小	自ら学ぶ力を育てていく教科指導の在り方	関東
宮下　直久	日野小	CIAによる学習	関東
島田　一生	井上小	同和教育の現状	関東
小林　寿子	高甫小	算数科の学習指導について	東京
山本　浩	仁礼小	社会科・生活科の関連について	未定
市川　和恵	仁礼小	教育課程(生活科)について	富山
小林　嘉明	小布施中	社会科教育について	東京
溝上　正弘	常盤中	英語教育の今後の発展と充実	東京
丸山　和男	相森中	コンピューターの導入と校内研修のあり方	関東
横前　香代	相森中	音楽指導について	関東
小林　宣章	墨坂中	教育現場における視聴覚機器の利用法	千葉
鷲田　俊一	墨坂中	理科教育について	名古屋
藤沢　文子	東中	理科教育について	関東

教育会総会に参加して

柏木　繁幸

本年の四月から、上高井にお世話になり、早二カ月が過ぎ去ろうとしています。学校にも子どもにも、少しずつ慣れ始めた、五月二十五日、教育会総会に参加しました。

五月とは思えぬ暑さにもかかわらず、大勢の熱心な先生方。上高井教育会のエネルギーに満ち溢れた雰囲気を印象づけられたように思います。

意見発表では、お二人の先生方の、日頃の実践に基づいた発表があり、同じ教職にある者として、そのご苦労が、実感に近い感覚をもって胸に落ちてきました。

また、宮脇先生のご講演、「人間と環境」は、生物社会を人間社会になぞらえたもので、明確な像をもって心に迫ってくるものがありました。後もう少し目的まで頑張らねばならない。最高条件の一歩手前の、少し厳しい、我慢を強要される、「生体学的最適条件」にあることが、非常に重要である。つまり、今の自分に満足せず、常に向上心をもち、教師としての進むべき道を探る、求道者であれと、諭されているかのように、感じました。

意義深い土曜の午後。自分の足元を見つめ直す、良い契機となりました。（仁礼小）

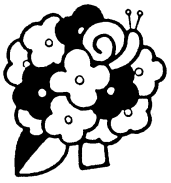
郡研の授業を参観して

西村　弘美

「大きな声で歌おう」という目標で始まった授業。生徒は、それぞれ自分たちで考えた大きな声を出すための方法で活動を開始する。一人ずつ離れた所へ行き、それをみんなが審査し、自分たちで決めた基準の声に達したら合格という活動をしている男子生徒。他パートの声に合わせて、何とか自分たちの声を大きくしようとする女生徒。生き生きした学習の後、録音した自分たちの合唱を聴き、今までの声量とは比べものにならないことに満足している生徒の顔。ふだん私たちは授業ではどうしても美しい表現にこだわり、目標もそれなりのものをおいてしまう。実際の生徒たちの声は到底及ばないが…。この授業では、敢えて大きな声にこだわり、とにかく生徒に、精一杯歌う喜びを体得させようと、普段の授業では一過程にすぎないことを一時間の目標とし、その中で生徒は生き生きと活動していた。そして次の目標として生徒は、美しい表現へと自分たちで考えていけるのだろう。

精一杯のびのび歌える中学生。その姿から得たものは、とても大きかった。

（小布施中）



同好会と私

丸山　武雄

今日、私たちは、激動する世界の中にいる。そして、否応なしに、日本も、私たち個人も、国際化の中で世界の人々と関わりをもち、異文化を理解し、受容して生きていかざるを得ない。また、今日ほど情報が氾濫し、価値観が多様化している時代もない。このような中に生きている私たちは、教育活動の源となる豊かさや確かさの研修を自らしていくことが、教師ひとりひとりの内なる課題であるように思う。私たち教師が、子どもたちに、善さに向かって成長することを切実に願っている以上、課題を忙しい現実の中で具現し、豊かさや確かさを自分のものにしていきたいものだ。

今、私はカウンセリング同好会に入会しているが、本郡の同好会活動には、すばらしいものがある。他の同好会も同じだと思うが、まず参加してみて、その良さが実感できる。同好会入会のきっかけは、数万と言われる相談事例をお持ちの松本文男先生の講演をお聞きしてからのことである。その中で、「直そう、直そうと思っていると、かえってだめですよ。」といわれたことが、私の心をとらえたことです。味わい深いことばでした。

会では、ここ数年間、松本先生をお迎えしていますが、本年七月にも、お話をお聞きすることになっています。今まで、不登校、校内・家庭内暴力、非行等について、味のあるお話をしていただきました。人間の業とか不可解さについて知ることが魅力です。

（栗ガ丘小）

校章・校歌めぐり ⑬

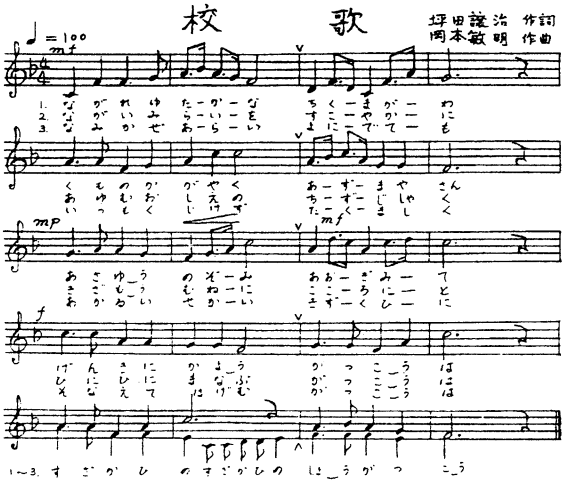
日野小学校

この校章は、昭和三十七年三月に制定された。

外側のたわわに実った稲穂は、黄金の波を打つ日野の自然と、子どもたちが、常に実り豊かな人間になるようにとの願いを表わしている。そして、特に稲穂を大切にする意味をこめて、リボンで結んである。

中の丸（日）は、湧き出ずる日野の泉の四方への広がりを青で示し、学校が日野地区の中央にあるので、中に小の字を配してある。

校歌も、昭和三十七年に制定された。



当時のＰＴＡ会長さんの提唱により、先輩徳永哲夫先生のお骨折りで、作詞は坪田譲治先生、作曲は岡本敏明先生に依頼した。

昭和三十七年三月には、坪田、岡本両先生をお招きし、盛大に発表会が行われた。

校歌は、児童はもとより父母にも広く親しまれ、式の際には必ず歌われている。又、運動会には、全校ダンスとして演じられ、ずっと先輩から後輩へと受け継がれている。

（望月映洲）

火ばち談義

基準のとり方で考える

小口　祐一

先輩の先生方や同僚の先生方とお話をしている中で、ふとしたことから同じ意味をもっていると思うことがありました。

◇　◇　◇

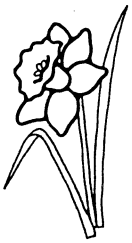
先日、音楽のことですが「絶対音階」という話がありました。「絶対音階」とは、（普通音叉でとる）基準となる音を与えられずに、ハ長調の「ド」ならその音を出せるということです。この学力は、一般の人には取れそうで取れない音だそうです。必ず基準となる音が与えられ、その音との高低によって他の音を出していくことが、音取りの学力となるものです。基準とは何とも大切なものなのかと考え、数学ではどこに表れてくるのかと思っていると、別の場で出てきました。

◇　◇　◇

今、（知・徳・体のうちの知にあたる部分の）学力問題が取りざたされていますが、長野県の学力はなぜ低いと言われているのでしょうか。東京大学の合格者数から、また共通テストの平均点から言われていることが大きいと思います。基準を成績のよい人に置いているということです。もしこの基準を、成績の中央においた場合はどうでしょうか。大学や短大でも、ある一定の合格点がとれていれば、その中から徳の面や体の面で選んでいくとすると、長野県の生徒はもっともっと高い合格率をとるはずです。

人間教育の名のもとに徳育も重視して教育を行ってきた結果が、知識面での評価を受けて、たじろいでしまっています。非行件数や成績上位者の数とはいった極端な場合に基準をおかずに、一般的なものさしで考えていくと、果たしてどんな結果が、そして、どんな方向が見えてくるのでしょうか。

（高山中）



Yさんの言葉

井浦　孝子

私が大学三年生の時の、中学校の同級会での事だった。中学を卒業してある会社に就職していたYさんが、私に話しかけてきた。

「おまえ、学校の先生になるんだってな。俺は中学校を卒業したけど、小学校六年の算数は何も教えてもらっていないんだぜ。五年のも全部やってないんだ。俺のくやしかった気持ちわかるか？おまえには、できない子の苦しさや気持ちのわかる先生になってほしいんだ。」

Yさんの話を聞いて、小学校時代の算数の時間を思い出してみた。算数の時間になると、毎時間、座席が変わった。一番後ろの端から一番二番と席順が決まっていて、教科書の進んでいる順に並んだ。一目で誰が一番で、誰が最後かわかるのだ。各自問題を解いて先生の所に行き、式と答えを言う。正答ならば次に進み、誤答ならもう一度。一つの問題を何時間もやる時があった。一番先に進んでいる人が次の単元に入った時、その単元のポイントを先生が全員に教える。だいたいこんなやり方だった。

Yさんは、いつも最後の方の席で、先生の所にノートを持っていくのは何時間に一度ぐらいだった。今、思えば、わからなくてただイスに腰かけて時の過ぎるのをじっと耐えていたのだろう。

私の目には、Yさんは勉強のできないダメな子としか写っていなかった。しかし、そのYさんが小学校の担任の先生のやり方を批判している。非常にショックだった。あのダメな子と思っていたYさんが、何ともたのもしくりっぱに思えた。一人前の社会人としてきびしさに耐えながら頑張っているんだなあと感心させられた。同時に、担任の先生に対してもYさんに対しても、その人のほんの一部分を見て全部を見たかのように思いこんでいた私は、なんて薄っぺらな人間なのかと思い知らされた。

できない子の苦しさや気持ちのわかる先生でありたいという願いと、増々難しく盛りだくさんの内容を思うと矛盾の毎日である。しかし、わからない子の増加の本質をしっかり見きわめつつ、日々の実践に頑張りたい。（井上小）

どこかにある場所

祢津　真理

町を歩く。大通りをそれて一本の横道に入る。その先に何があるか、それは知らない。それでも進む。大通りとは違う町並みがある。そして、そこには人の営みがある。ずっと続いてきた人の暮らしがある。見える物から、見えないものに思いをはせる。それが好きなのかもしれない。

思いもよらないものに出会うこともある。

秋の京都。町の中で突然、六波羅密寺に行き着いた。よく晴れた空に、息をのむような銀杏の黄色い葉。建物よりも、空の青さと葉っぱの黄色に圧倒されて、しばらくそこを動くことができなかった。学生時代を過ごした京都には名所と呼ばれる場所以外に、歩いてみたくなるような所がいくつもあった。

そして心を動かす場所は、身近なところにもあった。初任地の学校は山が近かった。お寺の裏山、やはり秋だった。落葉松の葉が降っていた。いつ果てるともなくサラサラと音をたてて降り続いていた。時間が止まったようなその場所で動くことはできなかった。

自分の足を止め、心を動かすような場所はどこにあるのかわからない。それなのに最近歩かなくなってしまった。

（日滝小）

編集後記

毎日、蒸し暑い日々が続いております。本年度一四三号から出発する会報をお届けいたします。

お忙しい中、原稿をお寄せ下さいまして、ありがとうございました。尚、本年度は次のメンバーで会誌、会報をお届けいたします。よろしくお願いします。

委員長　滝沢　祥匡（仁礼小）
副　田幸　文雄（日滝小）
田中　義人（須坂小）
神林　信雄（高甫小）
市川　治利（高山小）
正木　あや（日滝小）
小野　英幸（井上小）
小林　雅彦（相森中）
石田　正夫（高山中）
信教　牛山　通高（東　中）
（係　神林、小野）